

1 研究主題 「言語活動を核として思考表現を促す国語科学習指導」

2 研究の概要

部員は市教研国語部の研究主題及び活動計画を念頭に置き、各自、研究主題を追究すべく授業づくりに取り組む。そして、2回の授業研究会を核に、2校の研究成果に学びながら、各自の研究成果を紹介し合い、部員全員で研究を深めていく。

3 研究の実際

(1) 第1回授業研究会

平成27年9月11日、糸魚川小学校第5学年2組において、椋鳩十「大造じいさんとガン」を教材とした研究授業（授業者：渡邊興勝教諭）が行われた。糸魚川小学校の校内研究主題、読解力を高める学習指導の工夫～授業における「対話活動」と「視覚化」の在り方～に基づく授業であった。

糸魚川小学校では、授業のねらいに迫る手立てとしての対話活動、読みを変容させるための対話活動、対話活動と自己内対話との関わり等、「対話活動」に焦点を当てた研究が積み上げられている。思考を整理するための「話す」「書く」、新しい考えを知るための「聞く」、授業のねらいに迫る・読みを深めるための「話し合い」と対話活動に3つの意義をもたせ、明確な意図をもった対話活動を授業に仕組もうとしていた。



終始ニコニコ笑顔で児童に話し、児童の話を聴いていた教師。遠慮無く話せる・聴ける子ども同士の人間関係。落ち着いた雰囲気の中で授業が進み、児童は互いに思いや考えを絡ませながらペア対話、全体対話を行っていた。それらの活動を通し、児童一人ひとりの物語のクライマックス場面の読み取り（何が、どのように変わったか、どうして変わったのか叙述に即して答える）が深まっていった。協議会でも、課題設定の適切さ、ねらいに迫る有効な手立てとしての対話活動、これまでの学びを示す視覚資料

の有効性等について、高い評価を得た。

協議会后、上越教育大学准教授渡部洋一郎様の「文学教材の読解例と話し合いにおける理解や表現」と題した講話があり、参会者は更に研鑽を深めた。

(2) 第2回授業研究会

平成28年1月26日、下早川小学校第4学年において、教材文「アップとルーズで伝える」を用いた研究授業（授業者：古海美保教諭）が行われる。下早川小学校の校内研究主題、自分の思いや考えを相手に分かりやすく伝える子の育成～国語の「理解」と「表現」を関連させた学習を通して～に基づく授業であり、上越教育大学准教授佐藤多佳子様から御指導いただく予定である。

4 成果と課題

言語活動は目的ではなく、本時のねらいに迫るための手段である。そして、言語活動により思考を促すためには、対話の場が発言者の言いっ放しに終わらず、児童一人ひとりの自己内対話につながるような支援が必要となる。その策として、対話活動の意図を事前に示し見通しをもたせることや全体対話の場で教師が構造的に板書をするものの有効性が認められた。今後、部員一人ひとりが更なる授業実践を通して検証を進める。